「シンセサイザーの教育実践への活用」

領域名：成人保健看護

報告者：宮城裕子

教育及び実践の課題

成人保健看護領域では、成人保健看護実習I、II、クリティカル・緩和ケア実習で、学生は臨地実習の経験を通して講義や実習前に学習した知識や看護技術を統合し学習を深める。
一方で、臨地実習は慣れない環境や実践に対して学生にとっては緊張感の高い経験でもある。臨地実習という特異な学習状況での教育指導を考える中、近年、臨地実習と自己効力感との関連性をテーマにした研究が増えている。臨地実習での教育指導についてエビデンスを基に指導方法や学習環境を再考していきたい。

活用した論文の概要

米国リベラルアーツ大学 BSN の全看護学生を対象に臨床実習前後にオンライン匿名調査をおこなった結果、臨床能力、学習への期待感、患者/ピア/インストラクターとの相互作用、学習方法、自己効力感と臨床実習に関する懸念を含むテーマが示された。患者や医師とのコミュニケーション、心音と肺音の技術評価、面接スキル、記録、看護手順に関する学生の自信について、調査前後で大幅に向上していた。また看護技術の練習を続ける必要性、臨床記録について建設的なフィードバックを受けることの重要性、コミュニケーション技術の向上に取り組むことの必要性を学生が認識していた。臨床経験に関する学生の懸念に対し看護教育者は臨床経験の前・中・後を通して、臨床現場へのオリエンテーション、学生の技術練習の機会や振り返り、学生同士の学びあえる関係性が含まれる。

教育及び実践への活用

実習前に、学生はこれまでに学習した知識の確認や応用、技術の習得を図るための事前学習や演習を行っており、これらの事前課題や演習を含め実習は、教員 1 名が学生 5~6 人の教育指導を担当している。文献抄読と意見交換を通して、教員間で、看護学実習の学生がもつ懸念、学生の学習や経験に対するフィードバックの在り方や学生間でのピアサポートの有効性について共有した。学生が必要とする技術練習の確保や記録内容や時間の改善を取り入れ、また学生の主体的学びや自信に繋がる学習の工夫について事前課題や演習内容の検討を継続している。実習の場が支持的な環境となるような信頼関係形成や臨床現場との情報共有を含め、エビデンスを基にした実習指導の在り方について今後も継続して検討を重ねていきたいと考える。
また、コロナ禍で臨地実習経験が制限されている中においては、実習の目標に立ち返り、学生が学習した内容を踏まえて到達度を示していくことで学生の懸念への対応の継続も必要であると考える。

参考文献

Tracy P. George, Claire DeCristofaro, Pamela Ford Murphy. (2020). Self-efficacy and concerns of nursing students regarding clinical experiences. Nurse Education Today, 90, 104401.